

1、午後の授業

「ではみなさんは、そういうふうには川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのほんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問をかけました。カムパネルラが手をあげました。それから4、5人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちでするのでした。

ところが先生は早くもそれを見附けたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジョバンニは勢よく立ちあがりましたが、立って見るともうはつきりとそれを答えることができないうでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすくすわらいました。

ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。先生がまた云いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしょう。」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたがこんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上ったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじっとカムパネルラを見ていましたが、急いで「では。よし。」と云いながら、自分で星図を指しました。

「このほんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。」

ジョバンニはまっ赤になってうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかには涙がいつぱいになりました。そうだ僕は知っていたのだ、勿論カムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書斎から巨きな本

1、午後の授業

をもってきて、ぎんがというところをひろげ、まつ黒な頁いっぱい白い点々のある美しい写真を2人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈もなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云わないようになったので、カムパネルラがそれを知って気の毒がってわざと返事をしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのです。

先生はまた云いました。

「ですからもしこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その1つ1つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるならもつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮んでいるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集って見え

したがって白くぼんやり見えるのです。この模型をこらんなさい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まわすとしてこらんなさい。こつちの方はレンズが薄いのでわずかの光る粒—即ち星しか見えないのでしよう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをこらんなさい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい。」

そして教室中はしばらく机の蓋をあけたりしめたり本を重ねたりする音がいっぱいでしたがまもなくみんなはさちんと立って礼をすると教室を出ました。

2、活版所

ジヨバンニが学校の門を出るとき、同じ組の7、8人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木のところを集まっています。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジヨバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々はこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの枝にあかりをつけたりいろいろ仕度をしているのでした。

家へは帰らずジヨバンニが町を3つ曲ってある大きな活版処にはいつてすぐ入口の計算台に居ただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジヨバンニは靴をぬいで上りますと、突き当りの大きな扉をあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついてたくさんの輪転器がばたりばたりとまわり、きれで頭をしぼったりラムプシェードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いて居りました。

ジヨバンニはすぐ入口から3番目の高い卓子に座った人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚をさがしてから、

「これだけ拾って行けるかね。」と云いながら、一枚の紙切れを渡しました。ジヨバンニはその人の卓子の足もとから1つの小さな平たい函をとりだして向うの電燈のたくさんついた、たてかけである壁の隅の所へしゃがみ込むと小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。青い胸あてをした人がジヨバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う。」と云いますと、近くの45人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷くわらいました。

ジヨバンニは何べんも眼を拭いながら活字をだんだんひろいました。

6時がうってしばらくたつたころ、ジヨバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱をもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人は黙ってそれを受け取って微かにうなずきました。

ジヨバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやっぱりだまって小さな銀貨を1つジヨバンニに渡しました。ジヨバンニは俄か

に顔いろがよくなって威勢よくおじぎをすると台の下に置いた鞆をもっておもてへ飛びだしました。それから元気よく口笛を吹きながらパン屋へ寄ってパンの塊を1つと角砂糖を1袋買いますと一目散に走りだしました。

3、家

ジヨバンニが勢よく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。その3つならんだ入口の1番左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな2つの窓には日覆いが下りたままになっていました。

「お母さん。いま帰つたよ。工合悪くなかつたの。」ジヨバンニは靴をぬぎながら云いました。

「ああ、ジヨバンニ、お仕事がひどかつたろう。今日は涼しくてね。わたしはずうっと工合がいいよ。」

ジヨバンニは玄関を上って行きますとジヨバンニのお母さんがすぐ入口の室に白い巾を被つて寝んでいたのです。ジヨバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思つて。」

「ああ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

「お母さん。姉さんはいつ帰つたの。」

「ああ3時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。」

「来なかったろうかねえ。」

「ぼく行ってとつて来よう。」

「あああたしはゆっくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」

「ではぼくたべよう。」

ジヨバンニは窓のところからトマトの皿をとつてパンといっしょにしばらくむしゃむしゃたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰つてくると思うよ。」

「あああたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかったと書いてあつたよ。」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るようなそんな悪いことをした筈がないんだ。この前

お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかいの角だの今だってみんな標本室にあるんだ。6年生なんか授業のとき先生がかわるがわる教室へ持って行くよ。一昨年修学旅行で〔以下数文字分空白〕

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ。」

「みんながほくにあうとそれを云うよ。ひやかすように云うんだ。」

「おまえに悪口を云うの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云わない。カムパネルラはみんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ。」

「あの人はうちのお父さんとはちょうどおまえたちのように小さいときからのお友達だったそうだよ。」

「ああだからお父さんはほくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。ほくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄った。カムパネルラのうちにはアルコーランプで走る汽車があったんだ。レールを7つ組み合せると円くなってそれに電柱や信号標もついていて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。」

いつかアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、罐がすっかり煤けたよ。」

「そうかねえ。」

「いまま毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家中まだしいんとしているからな。」

「早いからねえ。」

「ザウエルという犬がいるよ。しつぽがまるで箒のようだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついでくるよ。ずうつと町の角までついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜のあかりを川へながしに行くんだって。きつと犬もついて行くよ。」

「そうだ。今晚は銀河のお祭だねえ。」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

「ああ行つておいで。川へははいらないでね。」

「ああぼく岸から見ただけなんだ。1時間で行つてくるよ。」

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒なら心配はないから。」

「ああきつと一緒だよ。お母さん、窓をしめて置こうか。」

「ああ、どうか。もう涼しいからね。」

ジヨバンニは立って窓をしめお皿やパンの袋を片附けると勢よく靴をはいて
「では1時間半で帰ってくるよ。」と云いながら暗い戸口を出ました。

4、ケンタウル祭の夜

ジョバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口付きで、檜のまつ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

坂の下に大きな1つの街燈が、青白く立派に光って立っていました。ジョバンニが、どどん電燈の方へ下りて行きますと、いままでばけもののように、長くぼんやり、うしろへ引いていたジョバンニの影ぼうしは、だんだん濃く黒くはつきりなつて、足をあげたり手を振ったり、ジョバンニの横の方へまわつて来るのでした。

(ぼくは立派な機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越す。そうら、こんどはぼくの影法師はコムパスだ。あんなにくるつとまわつて、前の方へ来た。)

とジョバンニが思いながら、大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新しいいえりの尖つたシャツを着て電燈の向う側の暗い小路から出て来て、ひらつとジョバンニとすれちがいました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジョバンニがまだそう云ってしまわないうちに、
「ジョバンニ、お父さんから、らつこの上着が来るよ。」その子が投げつけるようにうしろから叫びました。

ジョバンニは、ぱつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るように思いました。

「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向うのひばの植った家中へはいつていました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのだろう。走るときはまるで鼠のようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのはザネリがばかなからだ。」

ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまざまの灯や木の枝で、すっかりきれいに飾られた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、1秒ごとに石でこさえたふくろうの赤い眼が、くるつくるとうごいたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚い硝子の盤に載って星のようにゆっくり循環ったり、また向う側から、銅の人馬がゆっくりこつちへまわって来たりするのです。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。

ジヨバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですがその日と時間に合せて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま楕円形のなかにめぐってあらわれるようになって居りやはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむったような帯になってその下の方ではかすかに爆発して湯気でもあげているように見えるのでした。またそのうしろには3本の脚のついた小さな望遠鏡が黄いろに光って立っていましたいちばんうしろの壁には空じゅうの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図がかかっていました。ほんとうにこんなような蝸だの勇士だのそらにぎっしり居るだろうか、ああほくはその中をどこまでも歩いて見たいと思つてたりしてしばらくぼんやり立って居ました。

それから俄かにお母さんの牛乳のことを思いだしてジヨバンニはその店をはなれました。そしてきゆうくつな上着の肩を気にしながらそれでもわざと胸を張って大きく手を振って町を通って行きました。

空気は澄みきって、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまつ青なもみや檜の枝で包まれ、電気会社の前の6本のプラタヌスの木などは、中に沢山の豆電燈がついて、

ほんとうにそこらは人魚の都のように見えるのでした。子どもらは、みんな新らしい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、

「ケンタウルス、露をふらせ。」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしそうに遊んでいるのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらにぎやかさとはまるでちがったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮んでいるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂のするうすくらい台所の前に立って、ジョバンニは帽子をぬいで「今晚は、」と云いましたら、家の中はしいんとして誰も居たようではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい。」ジョバンニはまっすぐに立ってまた叫びました。するとしばらくたつてから、年老った女の人が、どこか工合が悪いようにそろそろと出て来て何か用かと口の中で云いました。

「あの、今日、牛乳が僕んところへ来なかつたので、貰いにあがつたんです。」ジョバンニが一生けん命勢よく云いました。

「いま誰もいないでわかりません。あしたにして下さい。」

その人は、赤い眼の下のところを擦りながら、ジョバンニを見おろして云いました。

「おっかさんが病氣なんですから今晚でないと困るんです。」

「ではもう少したってから来てください。」その人はもう行つてしまひそうでした。

「そうですか。ではありがとう。」ジョバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

十字になった町のかどを、まがろうとしましたら、向うの橋へ行く方の雑貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、67人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、めいめい烏瓜の燈火を持つてやつて来るのを見ました。その笑い声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジョバンニの同級の子供らだったのです。ジョバンニは思わずどきつとして戻ろうとしましたが、思い直して、一そう勢よくそつちへ歩いて行きました。

「川へ行くの。」ジョバンニが云おうとして、少しのどがつまったように思ったとき、

「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」さつきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続いて叫びました。ジョバンニはまっ赤になつて、もう歩いているかもわからず、急いで行きすぎようと思いましたら、そのなかにカムパ

ネルラが居たのです。カムパネルラは気の毒そうに、だまって少しわらって、怒らないだろうかというようにジョバンニの方を見ていました。

ジョバンニは、遁げるようにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行つて間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかえつて見ましたら、ザネリがやはりふりかえつて見ていました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向うにほんやり見える橋の方へ歩いて行つてしまつたのでした。ジョバンニは、なんとも云えずさびしくなつて、いきなり走り出しました。すると耳に手をあてて、わああと云いながら片足でぴよんぴよん跳んでいた小さな子供らは、ジョバンニが面白くてかけるのだと思つてわあいと叫びました。まもなくジョバンニは黒い丘の方へ急ぎました。

5、天気輪の柱

牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下に、ぼんやりふだんよりも低く連つて見えました。

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんだんのぼつて行きました。まつくらの草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしだされてあつたのです。草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もいて、あつる葉は青くすかし出され、ジョバンニは、さつきみんなの持つて行つた烏瓜のあかりのようだとも思いました。

そのまつ黒な、松や檜の林を越えると、俄かにがらんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ亘つているのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わけられたのでした。つりがねそうか野ぎくかの花が、そこらいちめんに、夢の中からでも薫りだしたというように咲き、鳥が1疋、丘の上を鳴き続けながら通つて行きました。

ジヨバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どこかかするからだを、つめたい草に投げました。町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのようにともし、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞えて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしずかにそよぎ、ジヨバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷されました。ジヨバンニは町のはずれから遠く黒くひろがった野原を見わたしました。

そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は1列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果を剥いたり、わらったり、いろいろな風に行っていると考えますと、ジヨバンニは、もう何とも云えずかなしくなつて、また眼をそらに挙げました。

あああの白いそらの帯がみんな星だというぞ。

ところがいくら見えていても、そのそらはひる先生の云つたような、がらんとした冷いとこだとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やある野原のように考えられて仕方なかつたのです。そしてジヨバンニは青い琴の星が、3つにも4つにもなつて、ちらちら瞬き、脚が何べんも出たり引つ込んだりして、とうとう蕈のように長く延びるのを見ました。またすぐ眼の下のまぢまでがやっぱりほんやりしたたくさんの星の集りか1つ

5、天気輪の柱

の大きなけむりかのように見えるように思いました。

6、銀河ステーション

そしてジヨバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく蛍のように、ぺかぺか消えたりともったりしているのを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃い鋼青のそらの野原にたちました。いま新しく灼いたばかりの青い鋼の板のような、そらの野原に、まっすぐにすきと立ったのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと云う声がしたと思うとききなり眼の前が、ぱっと明るくなって、まるで億万の蛍鳥賊の火を一ぺんに化石させて、そら中に沈めたという工合、またダイヤモンド会社で、ねだんがやすくならないために、わざと獲れないふりをして、かくして置いた金剛石を、誰かがいきなりひっくりかえして、ばら撒いたという風に、眼の前がさあっと明るくなって、ジヨバンニは、思わず何べんも眼を擦ってしまいました。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジヨバンニの乗っている小さな列車が走

りつづけていたのです。ほんとうにジヨバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のな
らんだ車室に、窓から外を見ながら座っていたのです。車室の中は、青い天蚕絨を張った腰掛け
が、まるでがら明きで、向うの鼠いろのワニスを塗った壁には、真鍮の大きなぼたんが2つ光っ
ているのでした。

すぐ前の席に、ぬれたようにまっ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を
見ているのに気が付きました。そしてそのこどもの肩のあたりが、どうも見たことのあるような
気がして、そう思うと、もうどうしても誰だかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこ
つちも窓から顔を出そうとしたとき、俄かにその子供が頭を引っ込めて、こつちを見ました。

それはカムパネルラだったのです。

ジヨバンニが、カムパネルラ、きみは前からここに居たのと云おうと思ったとき、カムパネル
ラが

「みんなはねずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども
追いつかなかった。」と云いました。

ジヨバンニは、(そうだ、ぼくたちはいま、いっしょにさそって出掛けたのだ。)とおもいながら、

「どこかで待っていていようか」と云いました。するとカムパネルラは

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎いにきたんだ。」

カムパネルラは、なぜかそう云いながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいというふうでした。するとジョバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるというような、おかしな気持ちが出てしまっていました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直って、勢よく云いました。

「ああしまった。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わない。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんとうにすきだ。川の遠くを飛んでいたって、ぼくはきつと見える。」そして、カムパネルラは、円い板のようになった地図を、しきりにぐるぐるまわして見ていました。まったくその中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどって行くのでした。そしてその地図の立派なことは、夜のように真っ黒な盤の上に、11の停車場や三角標、泉水や森が、青や橙や緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。ジョバンニはなんだかその地図をどこかで見たとおもいました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」

ジョバンニが云いました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらわなかったの。」

「ああ、ぼく銀河ステーションを通つたろうか。いまぼくたちの居るところ、ここだろう。」

ジョバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。

「そうだ。おや、あの河原は月夜だろうか。」

そつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジョバンニは云いながら、まるでね上りたいくらい愉快になって、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生けん命延びあがって、その天の川の水を、見きわめようとはしましたが、はじめはどうしてもそれが、はつきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおって、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のようにざらっと光ったりしながら、声もなくどんどん流れて行き、野原にはあっちにも

こつちにも、燐光の三角標が、うつくしく立っていたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、或いは三角形、或いは4辺形、あるいは電や鎖の形、さまざまにならんで、野原いっぱい光っているのです。ジョバンニは、まるでどきどきして、頭をやけに振りました。するとほんとうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかがやく三角標も、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり顫えたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に来た。」ジョバンニは云いました。

「それにこの汽車石炭をたいていないねえ。」ジョバンニが左手をつき出して窓から前の方を見ながら云いました。

「アルコールか電気だろう。」カムパネルラが云いました。

ごとごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そらのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青じろい微光の中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。

「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ。」カムパネルラが、窓の外を指さして云いました。

線路のへりになったみじかい芝草の中に、月長石でも刻まれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました。

「ぼく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせようか。」ジヨバンニは胸を躍らせて云いました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまったから。」

カムパネルラが、そう云ってしまうかしまわないうち、次のりんどうの花が、いっぱい光って過ぎて行きました。

と思ったら、もう次から次から、たくさんのおそろいな底をもったりんどうの花のコップが、湧くように、雨のように、眼の前を通り、三角標の列は、けむるように燃えるように、いよいよ光って立ったのです。

7、北十字とプリオシン海岸

「おつかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか。」

いきなり、カムパネルラが、思い切ったというように、少しどもりながら、急きこんで云いました。

ジヨバンニは、

（ああ、そうだ、ぼくのおつかさんは、あの遠い1つのちりのように見える橙いろの三角標のあたりにいらっしやって、いまぼくのことを考えているんだった。）と思いながら、ほんやりしてだまっていました。

「ぼくはおつかさんが、ほんとうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸なんだろう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえているようでした。

「きみのおつかさんは、なんにもひどいことないじゃないの。」ジヨバンニはびっくりして叫びま

した。

「ぼくわからない。けれども、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。」カムパネルラは、なにかほんとうに決心しているように見えました。

俄かに、車のなかで、ぱつと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、金剛石や草の露やあらゆる立派さをあつめたような、きらびやかな銀河の河床の上を水は声もなくかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼうつと青白く後光の射した1つの島が見えるのでした。その島の平らないただきに、立派な眼もさめるような、白い十字架がたつて、それはもう凍った北極の雪で铸たといったらいいか、すきつとした金いろの円光をいただいて、しずかに永久に立っているのです。

「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろからも声がありました。ふりかえって見ると、車室の中の旅人たちは、みなまっすぐにきものひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の数珠をかけたり、どの人もつましく指を組み合せて、そつちに祈っているのです。思わず2人もまっすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬は、まるで熟した苹果のあかしのようにつく

しくかがやいて見えました。

そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。

向う岸も、青じろくぼうつと光ってけむり、時々、やつぱりすすきが風にひるがえるらしく、さつとその銀いろがけむつて、息でもかけたように見え、また、たくさんのりんどうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい狐火のように思われました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすきの列でさえぎられ、白鳥の島は、2度ばかり、うしろの方に見えましたが、じきもうずうつと遠く小さく、絵のようになってしまい、またすすきがざわざわ鳴つて、とうとうすつかり見えなくなつてしまいました。ジョバンニのうしろには、いつから乗つていたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリック風の尼さんが、まん円な緑の瞳を、じつとまっすぐに落して、まだ何かことばか声かが、そつちから伝わつて来るのを、度んで聞いているというように見えました。旅人たちはしずかに席に戻り、2人も胸いっぱいのかなしみに似た新らしい気持ちをも、何気なくちがった語で、そつと談し合つたのです。

「もうじき白鳥の停車場だねえ。」

「ああ、11時かつきりには着くんだよ。」

早くも、シグナルの緑の燈と、ぼんやり白い柱とが、ちらつと窓のそとを過ぎ、それから硫黄のほのおのようなくらいほんやりした転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかになって、間もなくプラットホームの1列の電燈が、うつくしく規則正しくあらわれ、それがだんだん大きくなってひろがって、2人は丁度白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

さわやかな秋の時計の盤面には、青く灼かれたはがねの2本の針が、くつきり11時を指しました。みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなくなってしまいました。

〔20分停車〕と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか。」ジヨバンニが云いました。

「降りよう。」

2人は1度にはねあがってドアを飛び出して改札口へかけて行きました。ところが改札口には、明るい紫がかかった電燈が、1つ点いているばかり、誰も居ませんでした。そこら中を見ても、駅長や赤帽らしい人の、影もなかったのです。

2人は、停車場の前の、水晶細工のように見える銀杏の木に囲まれた、小さな広場に出ました。

そこから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通っていました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行つたか1人も見えませんでした。2人がその白い道を、肩をならべて行きますと、2人の影は、ちょうど四方に窓のある室の中の、2本の柱の影のように、また2つの車輪の輻のように幾本も幾本も四方へ出るのです。そして間もなく、あの汽車から見えたきれいな河原に來ました。

カムパネルラは、そのきれいな砂を1つまみ、掌にひろげ、指できしきしさせながら、夢のように云っているのです。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

「そうだ。」どこでぼくは、そんなこと習つたろうと思ひながら、ジヨバンニもぼんやり答えていました。

河原の礫は、みんなすきとおつて、たしかに水晶や黄玉や、またくしゃくしゃの皺曲をあらわしたのや、また稜から霧のような青白い光を出す鋼玉やらでした。ジヨバンニは、走つてその渚に行つて、水に手をひたしました。けれどもあやしいその銀河の水は、水素よりもっとすきとおつていたのです。それでもたしかに流れていたことは、2人の手首の、水にひたつたところが、少

し水銀いろに浮いたように見え、その手首にぶつつかつてできた波は、うつくしい燐光をあげて、ちらちらと燃えるように見えたのもわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいっぱいに見える崖の下に、白い岩が、まるで運動場のよう
に平らに川に沿って出ているのでした。そこに小さな56人の人かげが、何か掘り出すか埋め
かしているらしく、立ったり屈んだり、時々なにかの道具が、ピカッと光ったりしました。

「行ってみよう。」2人は、まるで1度に叫んで、そっちの方へ走りました。その白い岩になつた
処の入口に、

「プリオシン海岸」という、瀬戸物のつるつるした標札が立って、向うの渚には、ところどころ、
細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ。」カムパネルラが、不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長いさ
きの尖ったくるみの実のようなものをひろいました。

「くるみの実だよ。そら、沢山ある。流れて来たんじゃない。岩の中に入ってるんだ。」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない。」

「早くあすこへ行つて見よう。きつと何か掘ってるから。」

2人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさっきの方へ近よって行きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻でこさえたようなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、鶴嘴をふりあげたり、スコープをつかったりしている、3人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をしていました。

「そのその突起を壊さないように。スコープを使いたまえ、スコープを。おっと、もう少し遠くから掘って。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

見ると、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れて潰れたという風になって、半分以上掘り出されていました。そして気をつけて見ると、そこらには、蹄の2つある足跡のついた岩が、四角に10ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。「君たちは参観かね。」その大学士らしい人が、眼鏡をさらっとさせて、こつちを見て話しかけました。

「くるみが沢山あったろう。それはまあ、ざっと120万年ぐらい前のくるみだよ。ごく新らしい

方さ。ここは120万年前、第3紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れているところに、そっくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。このけものかね、これはボスといってね、おいおい、そこつるはしはよしたまえ。ていねいに鑿でやってくれたまえ。ボスといってね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要るんだ。ほくらからみると、ここは厚い立派な地層で、120万年ぐらい前にできたという証拠もいろいろあがるけれども、ほくらとちがったやつからみてもやつぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えるやしないかということなのだ。わかったかい。けれども、おいおい。そこもスコップではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてる筈じゃないか。」大学士はあわてて走って行きました。

「もう時間だよ。行こう。」カムパネルラが地図と腕時計とをくらべながら云いました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」ジヨバンニは、ていねいに大学士におじぎしました。

「そうですか。いや、さよなら。」大学士は、また忙がしそうに、あちこち歩きまわって監督をは

じめました。2人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないように走りまわりました。そしてほんとうに、風のように走れたのです。息も切れず膝もあつくなりませんでした。

こんなにしてかけるなら、もう世界中だつてかけれると、ジヨバンニは思いました。

そして2人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなって、間もなく2人は、もとの車室の席に座って、いま行つて来た方を、窓から見えました。

8、鳥を捕る人

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切そうな、大人の声が、2人のうしろで聞えました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外套を着て、白い巾でつつんだ荷物を、2つに分けて肩に掛けた、赤髯のせなかのかがんだ人でした。

「ええ、いいんです。」ジヨバンニは、少し肩をすぼめて挨拶しました。その人は、ひげの中でかすかに微笑いながら荷物をゆっくり網棚にのせました。ジヨバンニは、なにか大へんさびしいようなかなしいような気がして、だまって正面の時計を見ていましたら、ずうつと前の方で、硝子の笛のようなものが鳴りました。汽車はもう、しずかにうごいていたのです。カムパネルラは、車室の天井を、あちこち見ていました。その1つのあかりに黒い甲虫がとまってその影が大きく天井にうつつていたのです。赤ひげの人は、なにかなつかしそうにわらいながら、ジヨバンニやカムパネルラのようにすを見ていました。汽車はもうだんだん早くなって、すすきと川と、かわるが

わる窓の外から光りました。

赤ひげの人が、少しおずおずしながら、2人に訊きました。

「あなた方は、どちらへいらっしゃるんですか。」

「どこまでも行くんです。」ジヨバンニは、少しきまり悪そうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、じっさい、どこまでも行きますぜ。」

「あなたはどこへ行くんです。」カムパネルラが、いきなり、喧嘩のようにたずねましたので、ジヨバンニは、思わずわらいました。すると、向うの席に居た、尖った帽子をかぶり、大きな鍵を腰に下げた人も、ちらつとこつちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑いだしてしまいました。ところがその人は別に怒ったでもなく、頬をびくびくしながら返事しました。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁です。さぎも白鳥もです。」

「鶴はたくさんいますか。」

「居ますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかったのですか。」

「いいえ。」

「いまでも聞えるじゃありませんか。そら、耳をすまして聴いてごらんさい。」

2人は眼を挙げ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くような音が聞えて来るのでした。

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

「鷺です。」ジヨバンニは、どっちでもいいと思いつながら答えました。

「そいつはな、雑作ない。さぎというものは、みんな天の川の砂が凝って、ほおつとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待っていて、鷺がみんな、脚をこういう風にして下りてくるところを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたつと押えちまうんです。するともう鷺は、かたまつて安心して死んじまいます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押し葉にするだけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか。」

「おかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいも不審もありませんや。そら。」その男は立って、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまとって来たばかりです。」

「ほんとうに鷺だねえ。」2人は思わず叫びました。まっ白な、あのさっきの北の十字架のように光る鷺のからだだが、10ばかり、少しひらべったくなくなって、黒い脚をちぢめて、浮彫のようにならんでいたのです。

「眼をつぶってるね。」カムパネルラは、指でそつと、鷺の3日月がたの白い瞑った眼にさわりました。頭の上の槍のような白い毛もちゃんとついていました。

「ね、そうでしょう。」鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくると包んで紐でくくりました。誰がいったいここで鷺なんぞ喰べるだろうとジョバンニは思いながら訊きました。

「鷺はおいしいんですか。」

「ええ、毎日注文があります。しかし雁の方が、もっと売れます。雁の方がずっと柄がいいし、第

一手数がありませんからな。そら。」鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じろとまだらになって、なにかのあかりのようにひかる雁が、ちょうどさつきの鷺のように、くちばしを揃えて、少し扁べったくなくて、ならんでいました。

「こっちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。」鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひっぱりました。するとそれは、チョコレートでもできているように、すつときれいになれました。

「どうです。すこしたべてごらんなさい。」鳥捕りは、それを2つにちぎってわたしました。ジョバンニは、ちよつと喰べてみて、(なんだ、やっぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりも、もっとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかそらの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、大へん気の毒だ。)とおもいながら、やっぱりぼくぼくそれをたべていました。

「も少しおあがりなさい。」鳥捕りがまた包みを出しました。ジョバンニは、もつとたたえたかったですけれども、

「ええ、ありがとう。」と云つて遠慮しましたら、鳥捕りは、こんどは向うの席の、鍵をもった人

に出しました。

「いや、商売ものを貰っちゃすみませんな。」その人は、帽子をとりました。

「いいえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥の景気は。」

「いや、すてきなもんですよ。一昨日の第2限ころなんか、なぜ燈台の灯を、規則以外に聞させるかって、あつちからもこつちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こつちがやるんじゃない、渡り鳥どもが、まっ黒にかたまつて、あかしの前を通るのでから仕方ありませんや。わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのとこへ持つて来たつて仕方がねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方もなく細い大将へやれつて、斯う云つてやりましたがね、はつは。」

すすきがなくなつたために、向うの野原から、ぱつとあかりが射して来ました。

「鷺の方はなぜ手数なんですか。」カムパネルラは、さつきから、訊こうと思つていたので。

「それはね、鷺を喰べるには、」鳥捕りは、こつちに向き直りました。

「天の川の水あかりに、10日もつるして置くかね、そうでなければ、砂に34日うずめなければいけないんだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるようになるよ。」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう。」やつぱりおなじことを考えていたとみえて、カ

ムパネルラが、思い切ったというように、尋ねました。鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、「そうそう、ここで降りなけあ。」と云いながら、立って荷物をとったと思うと、もう見えなくなっていました。

「どこへ行ったんだらう。」

2人は顔を見合せましたら、燈台守は、にやにや笑って、少し伸びあがるようにしながら、2人の横の窓の外をのぞきました。2人もそっちを見ましたら、たつたいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、うつくしい燐光を出す、いちめんのかわらははこぐさの上に立って、まじめな顔をして両手をひろげて、じつとそらを見ていたのです。

「あすこへ行ってる。ずいぶん奇体だねえ。きつとまた鳥をつかまえるとこだねえ。汽車が走って行かないうちに、早く鳥がおけるといいな。」と云った途端、がらんとした桔梗いろの空から、さつき見たような鷺が、まるで雪の降るように、ぎゃあぎゃあ叫びながら、いつぱいに舞いおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだというようにほくほくして、両足をかきり60度に開いて立って、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片っ端から押えて、布の袋の中に入れるのでした。すると鷺は、蛍のように、袋の中でしばらく、青くぺかぺか光ったり消えた

りしていましたが、おしまいとうとう、みんなぼんやり白くなって、眼をつぶるのでした。ところが、つかまえられる鳥よりは、つかまえられないで無事に天の川の砂の上に降りるものの方が多かったのです。それは見ていると、足が砂へつくや否や、まるで雪の融けるように、縮まって扁平たくなって、間もなく熔鉱炉から出た銅の汁のように、砂や砂利の上にひろがり、しばらくは鳥の形が、砂についているのですが、それも23度明るくなったり暗くなったりしているうちに、もうすっかりまわりと同じいろになってしまふのでした。

鳥捕りは20疋ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたって、死ぬときのような形をしました。と思つたら、もうそこに鳥捕りの形はなくなつて、却つて、

「ああせいせいした。どうもからだに恰度合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんな。」というききおぼえのある声が、ジヨバンニの隣りにしました。見ると鳥捕りは、もうそこでとつて来た鷺を、きちんとそろえて、1つずつ重ね直しているのでした。

「どうしてあすこから、いっぺんにここへ来たんですか。」ジヨバンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないような、おかしな気がして問いました。

「どうしてつて、来ようとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか。」

ジヨバンニは、すぐ返事しようと思いましたが、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔を真っ赤にして何か思い出そうとしていたのでした。

「ああ、遠くからですね。」鳥捕りは、わかったというように雑作なくうなずきました。

9、ジヨバンニの切符

「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。」

窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が4一棟ばかり立って、その1つの平屋根の上に、眼もさめるような、青宝玉と黄玉の大きな2つのすきとおった球が、輪になってしずかにくるとまわっていました。黄いろのがだんだん向うへまわって行つて、青い小さいのがこつちへ進んで来、間もなく2つのはじは、重なり合つて、きれいな緑いろの両面一凸レンズのかたちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみ出して、とうとう青いのは、すっかりトパースの正面に来ましたので、緑の中心と黄いろな明るい環とができました。それがまただんだん横へ外れて、前のレンズの形を逆に繰り返し、とうとうすつとはなれて、サファイアは向うへめぐり、黄いろのはこつちへ進み、また丁度さっきのような風になりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、睡つてるように、しずかによこたわつたのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……。」鳥捕りが云いかけたとき、

「切符を拝見いたします。」3人の席の横に、赤い帽子をかぶったせいの高い車掌が、いつかまっすぐに立っていて云いました。鳥捕りは、だまってかくしから、小さな紙きれを出しました。車掌はちよっと見て、すぐ眼をそらして、（あなた方のは？）というように、指をうごかしながら、手をジョバンニたちの方へ出しました。

「さあ、」ジョバンニは困って、もじもじしていましたら、カムパネルラは、わけもないという風で、小さな鼠いろの切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあわててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入っていたかとおもいながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳んだ紙きれにあたりました。こんなもの入っていたらうかと思つて、急いで出してみましたら、それは4つに折つたはがきぐらいの大きさの緑いろの紙でした。車掌が手を出しているもんですから何でも構わない、やっちまえと思つて渡しましたら、車掌はまっすぐに立ち直つて丁寧なそれを開いて見ていました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきりに直したりしていましたし燈台看守も下からそれを熱心にのぞいていましたから、ジョバンニはたしかにあれは証明書か何かだつたと考えて少し胸が熱くなるような気がしました。

「これは3次空間の方からお持ちになったのですか。」車掌がたずねました。

「何だかわかりません。」もう大丈夫だと安心しながらジョバンニはそつちを見あげてくつくつ笑いました。

「よろしゅうございます。南十字へ着きますのは、次の第3時ころになります。」車掌は紙をジョバンニに渡して向うへ行きました。

カムパネルラは、その紙切れが何だったか待ち兼ねたというように急いでのできこみしました。ジョバンニも全く早く見たかったです。ところがそれはいちめん黒い唐草のような模様の中に、おかしな10ばかりの字を印刷したものでだまって見ていると何だかその中へ吸い込まれてしまふような気がするのです。すると鳥捕りが横からちらつとそれを見てあわてたように云いました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれば、なるほど、こんな不完全な幻想第4次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈でさあ、あなた方大したもんですね。」

「何だかわかりません。」ジョバンニが赤くなつて答えながらそれを又畳んでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカムパネルラと2人、また窓の外をながめていましたが、その鳥捕りの時々大したもんだというようにちらちらこつちを見ているのがほんやりわかりました。

「もうじき鷺の停車場だよ。」カムパネルラが向う岸の、3つならんだ小さな青じろい三角標と地図とを見較べて云いました。

ジョバンニはなんだかわけもわからずににわかにとなりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。鷺をつかまえてせいせいしたとよるこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびっくりしたように横目で見てあわててほめだしたり、そんなことをいちいち考えていると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持っているものでも食べるものでもなんでもやっつけてしまいたい、もうこの人のほんとうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立って百年つづけて立って鳥をとってやっってもいいというような気がして、どうしても黙っていられなくなりました。ほんとうにあなたのほしいものは一体何ですか、と訊こうとして、それではあんまり出し抜けだから、どうしようかと考えて振り返って見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ませんでした。網棚の上には白い荷物も見えなかったのです。また窓の外で足を

ふんばってそれを見上げて鷺を捕る支度をしているのかと思つて、急いでそつちを見ましたが、外はいちめんのうつくしい砂子と白いすすきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかも尖った帽子も見えませんでした。

「あの人どこへ行つたろう。」カムパネルラもぼんやりそう云っていました。

「どこへ行つたろう。一体どこでまたあうのだろう。僕はどうしても少しあの人に物を言わなかつたろう。」

「ああ、僕もそう思っているよ。」

「僕はある人が邪魔なような気がしたんだ。だから僕は大へんつらい。」ジョバンニはこんな変てこな気もちは、ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで云つたこともないと思ひました。

「何だか苹果の匂がする。僕いま苹果のこと考えたためだろうか。」カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。

「ほんとうに苹果の匂だよ。それから野茨の匂もする。」ジョバンニもそこらを見ましたがやつぱりそれは窓からでも入って来るらしいのでした。いま秋だから野茨の花の匂のする筈はないとジョバンニは思ひました。

そしたら俄かにそこに、つやつやした黒い髪の6つばかりの男の子が赤いジャケットのぼたんもかけずひどくびっくりしたような顔をしてがたがたふるえてはだして立っていました。隣りには黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年が一ぱいに風に吹かれているけやきの木のような姿勢で、男の子の手をしっかりとひいて立っていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ。」青年のうしろにもひとり12ばかりの眼の茶いろな可愛らしい女の子が黒い外套を着て青年の腕にすがって不思議そうに窓の外を見ているのでした。

「ああ、ここはランカシャイヤだ。いや、コンネクテカット州だ。いや、ああ、ほくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召されているのです。」黒服の青年はよろこびにかがやいてその女の子に云いました。けれどもなぜかまた額に深く皺を刻んで、それに大へんつかれているらしく、無理に笑いながら男の子をジョバンニのとなりに座らせました。

それから女の子にやさしくカムパネルラのとなりの席を指さしました。女の子はすなおにそこへ座って、きちんと両手を組み合せました。

「ぼくおおねえさんのとこへ行くんだよう。」腰掛けたばかりの男の子は顔を変にして燈台看守の向うの席に座ったばかりの青年に云いました。青年は何とも云えず悲しそうな顔をして、じつとその子の、ちぢれてぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあててしくしく泣いてしまいました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらっしゃいます。それよりも、おつかさんはどんなに永く待っていらっしゃったでしょう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたっているだろう、雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるにわたこのやぶをまわってあそんでいるだろうかと考えたりほんとうに待って心配していらっしゃるんですから、早く行っておつかさんにお目にかかりましょうね。」

「うん、だけ僕、船に乗らなけあよかつたなあ。」

「ええ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあの夏中、ツインクル、ツインクル、リトル、スター をうたつてやすむとき、いつも窓からぼんやり白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょう、あんなに光っています。」

泣いていた姉もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年は教えるようにそつと姉弟にまた云

いました。

「わたしたちはもうなんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないところを旅して、じき神さまのそこへ行きます。そこならもうほんとうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいです。そしてわたしたちの代りにボートへ乗れた人たちは、きつとみんな助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元気を出しておもしろくうたって行きましょう。」青年は男の子のぬれたような黒い髪をなで、みんなを慰めながら、自分もだんだん顔いろがかがやいて来ました。

「あなた方はどちらからいらつしやつたのですか。どうなすつたのですか。」さつきの燈台看守がやつと少しわかつたように青年にたずねました。青年はかすかにわらいました。

「いえ、氷山にぶつつかつて船が沈みましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用で2ヶ月前一足さきに本国へお帰りになったのであとから発つたのです。私は大学へはいつていて、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちょうど12日目、今日か昨日のあたりです、船が氷山にぶつつかつて一ぺんに傾きもう沈みかけました。月のあかりはどこかほんやりありましたが、霧が非常に深かつたのです。ところがボートは左舷の方半分はもうだめになっていましたから、

とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となって、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのために祈って呉れました。けれどもそこからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても押しつける勇気がなかったのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思いましたが前からいる子供らを押しつけようとなりました。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはこのまま神のお前にみんなで行く方がほんとうにこの方たちの幸福だとも思いました。それからまたその神にそむく罪はわたくしひとりです。よってぜひとも助けてあげようと思いました。けれどもどうして見ているとそれができないのでした。子どもらばかりボートの中へはなしてやってお母さんが狂気のようにキスを送りお父さんがかないのをじっとこらえてまっすぐに立っているなどとももう腸もちぎれるようでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすっかり覚悟してこの人たち2人を抱いて、浮べるだけは浮ぼうとかたまつて船の沈むのを待っていました。誰が投げたかライフブイが1つ飛んで来ましたけれども滑ってずうっと向うへ行ってしまった。私は一生けん命で甲板の格子になったところをはなして、3人それにしっかりとりつききました。どこからともなく

番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのとき俄かに大きな音がして私たちは水に落ちもう渦に入ったと思いながらすっかりこの人たちをだいてそれからほうつとしたと思っただけもうここへ来ていたのです。この方たちのお母さんは一昨年没くなられました。ええボートはきつと助かったにちがいません、何せよほど熟練な水夫たちが漕いですばやく船からはなれていましたから。」

そこから小さないのりの声が聞えジョバンニもカムパネルラもいままで忘れていたいろいろなことをぼんやり思い出して眼が熱くなりました。

（ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかったらうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかかって、たれかが一生けんめいはたらいっている。ぼくはそのひとにほんとうに気の毒でそしてすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいったいどうしたらいいのだろう。）ジョバンニは首を垂れて、すっかりふさぎ込んでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中のできごとなら峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく1あしずつですから。」

燈台守がなくさめていました。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです。」

青年が祈るようにそう答えました。

そしてあの姉弟はもうつかれてめいめいぐったり席によりかかつて睡っていました。さっきのあのはだだった足にはいつか白い柔らかな靴をはいていたのです。

ごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進みました。向うの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈のようでした。百も千もの大小さまざまな三角標、その大きなものの上には赤い点点をうった測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集ってぽおっと青白い霧のよう、そこからかまたはもつと向うからかときどきさまざまの形のぼんやりした狼煙のようなものが、かわるがわるきれいな桔梗いろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとおった奇麗な風は、ばらの匂でいっぱいでした。

「いかがですか。こういう苹果はおはじめてでしょう。」向うの席の燈台看守がいつか黄金と紅でうつくしくいろどられた大きな苹果を落さないように両手で膝の上にかかえていました。

「おや、どつから来たのですか。立派ですねえ。ここらではこんな苹果ができるのですか。」青年はほんとうにびっくりしたらしく燈台看守の両手にかかえられた1もりの苹果を眼を細くしたり首をまげたりしながらわれを忘れてながめていました。

「いや、まあおとり下さい。どうか、まあおとり下さい。」

青年は1つとってジョバンニたちの方をちよつと見ました。

「さあ、向うの坊ちゃんがた。いかがですか。おとり下さい。」

ジョバンニは坊ちゃんといわれたのですこししやくにさわってだまっていたましたがカムパネルラは

「ありがとうございます」と云いました。すると青年は自分でとって1つずつ2人に送ってよこしましたのでジョバンニも立ってありがとうございますと云いました。

燈台看守はやつと両腕があいたのでこんどは自分で1つずつ睡っている姉弟の膝にそつと置きました。

「どうもありがとうございます。どこでできるのですか。こんな立派な苹果は。」

青年はつくづく見ながら云いました。

「この辺ではもちろん農業はいたしますけれども大ていひとりでいいものができるとな約束になつて居ります。農業だつてそんなに骨は折れはしません。たいてい自分の望む種子さえ播けばひとりでいんどんできます。米だつてパシフィック辺のように殻もないし10倍も大きくて匂もいいのです。けれどもあなたがたのいらつしやる方なら農業はもうありません。苹果だつてお菓子だつてかすが少しもありませんからみんなそのひとそのひとによつてちがつたわずかのいいかおりになつて毛あなからちらけてしまうのです。」

にわかになつて男の子がぱつちり眼をあいて云いました。

「ああほくいまお母さんの夢をみていたよ。お母さんがね立派な戸棚や本のあるとこに居てね、ほくの方を見て手をだしてにこにこにこわらつたよ。ほくおつかさん。りんごをひろつてきてあげましょうか云つたら眼がさめちやつた。ああこさつきの汽車のなかだねえ。」

「その苹果がそこにあります。このおじさんにいただいたのですよ。」青年が云いました。

「ありがとうおじさん。おや、かおるねえさんまだねてるねえ、ほくおこしてやろう。ねえさん。ごらん、りんごをもらつたよ。おきてごらん。」

姉はわらつて眼をさましまぶしそくに両手を眼にあててそれから苹果を見ました。男の子はま

るでパイを喰べるようにもうそれを喰べていました、また折角剥いたそのきれいな皮も、くるくるコルク抜きのような形になって床へ落ちるまでの間にはすうっと、灰いろに光って蒸発してしまふのでした。

2人はりんごを大切にポケットにしまいました。

川下の向う岸に青く茂った大きな林が見え、その枝には熟してまつ赤に光る円い実がいっぱい、その林のまん中に高い高い三角標が立って、森の中からはオーケストラベルやジロフォンにまじって何とも云えずきれいな音いろが、とけるように浸みるように風につれて流れて来るのでした。

青年はぞくつとしてからだをふるうようにしました。

だまってその譜を聞いていると、そこらにいちめん黄いろやうすい緑の明るい野原か敷物かがひろがり、またまつ白な蠟のような露が太陽の面を擦めて行くように思われました。

「まあ、あの鳥。」カムパネルラのとりのかおると呼ばれた女の子が叫びました。

「からすでない。みんなかささぎだ。」カムパネルラがまた何気なく叱るように叫びましたので、ジョバンニはまた思わず笑い、女の子はきまり悪そうにしました。まったく河原の青じろいあか

りの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっばいに列になってとまってじつと川の微光を受けているのでした。

「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛がぴんと延びてますから。」青年はとりなすように云いました。

向うの青い森の中の三角標はすっかり汽車の正面にきました。そのとき汽車のずうつとうしろの方からあの聞きなれた　番の讚美歌のふしが聞えてきました。よほどの人数で合唱しているらしいのでした。青年はさつと顔いろが青ざめ、たつて一ぺんそつちへ行きそうにしましたが思いかえしてまた座りました。かおる子はハンケチを顔にあててしまいました。ジョバンニまで何だか鼻が変になりました。けれどもいつともなく誰ともなくその歌は歌い出されだんだんはつきり強くなりました。思わずジョバンニもカムパネルラも一緒にうたい出したのです。

そして青い橄欖の森が見えない天の川の向うにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行ってしまいそこから流れて来るあやしい楽器の音ももう汽車のひびきや風の音にすり耗らされずうつつかすかになりました。

「あ孔雀が居るよ。」

「ええたくさん居たわ。」女の子がこたえました。

ジョバンニはその小さく小さくなつていまはもう1つの緑いろの貝ぼたんのように見える森の上にあざと青じろく時々光つてその孔雀がはねをひろげたりとじたりする光の反射を見ました。

「そうだ、孔雀の声だつてさつき聞えた。」カムパネルラがおる子に云いました。

「ええ、30疋ぐらいはたしかに居たわ。ハーブのように聞えたのはみんな孔雀よ。」女の子が答えました。ジョバンニは俄かに何とも云えずかなしい気がして思わず

「カムパネルラ、ここからはねおりて遊んで行こうよ。」とこわい顔をして云おうとしたくらいでした。

川は2つにわかれてました。そのまっくらな島のまん中に高い高いやぐらが1つ組まれてその上に1人の寛い服を着て赤い帽子をかぶった男が立っていました。そして両手に赤と青の旗をもつてそらを見上げて信号しているのです。ジョバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗をふっていました。俄かに赤旗をおろしてうしろにかくすようにし青い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のように烈しく振りました。すると空中にざあつと雨のような音がして何か

まっくらなものがいくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸のように川の向うの方へ飛んで行くのでした。ジョバンニは思わず窓からからだを半分出してそつちを見あげました。美しい美しい桔梗いろのがらんとした空の下を実に何万という小さな鳥どもが幾組も幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通って行くのでした。

「鳥が飛んで行くな。」ジョバンニが窓の外で云いました。

「どら、」カムパネルラもそらを見ました。そのときあのやぐらの上のゆるい服の男は俄かに赤い旗をあげて狂気のようにふりうごかしました。するとぴたつと鳥の群は通らなくなりそれと同時にぴしゃあんという潰れたような音が川下の方で起つてそれからしばらくしいんとしました。と思つたらあの赤帽の信号手がまた青い旗をふつて叫んでいたのです。

「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥。」その声もはっきり聞えました。それといっしょにまた幾万という鳥の群がそらをまっすぐにかけてのです。2人の顔を出しているまん中の窓からあの女の子が顔を出して美しい頬をかがやかせながらそらを仰ぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそのきれいなこと。」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意気ないやだいたいと思ひながらだまって口をむすんでそら

を見あげていました。女の子は小さくほっと息をしてだまって席へ戻りました。カムパネルラが気の毒そうに窓から顔を引つ込めて地図を見ていました。

「あの人鳥へ教えてるんでしょうか。」女の子がそつとカムパネルラにたずねました。

「わたり鳥へ信号してるんです。きつとどこからかのろしがあがるためでしょう。」カムパネルラが少しおぼつかないように答えました。そして車の中はしいんとなりました。ジョバンニはもう頭を引つ込めたかったですけれども明るいところへ顔を出すのがつらかったのでだまってこらえてそのまま立って口笛を吹いていました。

（どうして僕はこんなにかなしのさだろう。僕はもつところもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうつと向うにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにしずかでつめたい。僕はあれをよく見てこころもちをしずめるんだ。）ジョバンニは熱くて痛いあたまを両手で押えるようにしてそっちの方を見ました。（ああほんとうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだろうか。カムパネルラだってあんな女の子とおもしろそうに談しているし僕はほんとうにつらいなあ。）ジョバンニの眼はまた泪でいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行ったようにぼんやり白く見えるだけでした。

そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖の上を通るようになりました。向う岸もまた黒い
ろの崖が川の岸を下流に下るにしたがってだんだん高くなつて行くのでした。そしてちらつと大
きなとうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大
きな苞が赤い毛を吐いて真珠のような実もちらつと見えたのでした。それはだんだん数を増して来
てもういまは列のように崖と線路との間にならび思わずジョバンニが窓から顔を引つ込めて向う
側の窓を見ましたときは美しいそらの野原の地平線のはてまでその大きなとうもろこしの木がほ
とんどいちめんに植えられてさやさや風にゆらぎその立派なちぢれた葉のさきからはまるでひる
の間にいっぱい日光を吸った金剛石のように露がいっぱいについて赤や緑やきらきら燃えて光つ
ているのでした。カムパネルラが「あれとうもろこしだねえ」とジョバンニに云いましたけれど
もジョバンニはどうしても気持がなおりませんでしたからだだぶつきり棒に野原を見たまま「そ
うだろう。」と答えました。そのとき汽車はだんだんしずかになつていくつかのシグナルとてんで
つ器の灯を過ぎ小さな停車場にとまりました。

その正面の青じろい時計はかつきり第2時を示しその振子は風もなくなり汽車もうごかずしず
かなしずかな野原のなかにカチツカチツと正しく時を刻んで行くのでした。

そしてまったくその振子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすかな旋律が糸のように流れて来るのでした。「新世界交響楽だわ。」姉がひとりごとのようにこつちを見ながらそつと云いました。全くもう車の中ではあの黒服の丈高い青年も誰もみんなやさしい夢を見ているのでした。

（こんなはずかないところで僕はどうしてもっと愉快になれないだろう。どうしてこんなにひとりさびしいのだろう。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といっしょに汽車に乗っているながらまるであんな女の子とばかり談しているんだもの。僕はほんとうにつらい。）ジョバンニはまた両手で顔を半分かくすようにして向うの窓のそとを見つめていました。すきとおった硝子のような笛が鳴って汽車はしずかに動き出し、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口笛を吹きました。

「ええ、ええ、もうこの辺はひどい高原ですから。」うしろの方で誰かとしよりらしい人のいま眼がさめたという風ではきはき談している声がしました。

「とうもろこしだって棒で2尺も孔をあけておいてそこへ播かないと生えないんです。」

「そうですか。川まではよほどありませんようかねえ、」

「ええええ河までは2千尺から6千尺あります。もうまるでひどい峡谷になってるんです。」

そうそうここはコロラドの高原じゃなかったらうか、ジョバンニは思わずそう思いました。カムパネルラはまださびしそうにひとり口笛を吹き、女の子はまるで絹で包んだ苹果のような顔をしてジョバンニの見る方を見ていました。突然とうもろこしがなくなつて巨きな黒い野原がいつぱいにひられました。新世界交響楽はいよいよはつきり地平線のはてから湧きそのまっ黒な野原のなかを1人のインデアンが白い鳥の羽根を頭につけたくさんの石を腕と胸にかざり小さな弓に矢を番えて一目散に汽車を追つて来るのでした。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。ごらんなさい。」

黒服の青年も眼をさました。ジョバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走つて来るわ、あら、走つて来るわ。追いかけてるんでしよう。」

「いいえ、汽車を追つてるんじゃないんですよ。獵をするか踊るかしてるんですよ。」青年はいまどこに居るか忘れたという風にポケットに手を入れて立ちながら云いました。

まったくインデアンは半分は踊っているようでした。第一かけるにしても足のふみようがもつと経済もとれ本気にもなれそうでした。にわかにくつきり白いその羽根は前の方へ倒れるように

なりインデアンはぴたっと立ちどまってすばやく弓を空にひきました。そこから1羽の鶴がふらふらと落ちて来てまた走り出したインディアンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インデアンはうれしそうに立ってわらいました。そしてその鶴をもつてこつちを見ている影ももうどんな小さく遠くなり電しんばしらの碍子がきらつきらっと続いて2つばかり光ってまたとうもろこしの林になってしまいました。こつち側の窓を見ますと汽車はほんとうに高い高い崖の上を走っていてその谷の底には川がやっぱり幅ひろく明るく流れていたのです。

「ええ、もうこの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易じゃありません。この傾斜があるもんですから汽車は決して向うからこつちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなつたでしょう。」さっきの老人らしい声が云いました。

どんだん自動車は降りて行きました。崖のはじめに鉄道がかかるときは川が明るく下にのぞけたのです。ジョバンニはだんだんこころもちが明るくなつて来ました。汽車が小さな小屋の前を通つてその前にしょんぼりひとりの子供が立ってこつちを見ているときなどは思わずほうと叫びました。

どんだん自動車は走って行きました。室中のひとたちは半分うしろの方へ倒れるように

なりながら腰掛にすっかりしがみついています。ジヨバンニは思わずカムパネルラとわらいました。もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいまままでよほど激しく流れて来たらしくときどきちらちら光ってながれているのでした。うすあかい河原なでしこの花があちこち咲いていました。汽車はようやく落ち着いたようにゆっくりと走っていました。

向うとこつちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたっていました。

「あれ何の旗だろうね。」ジヨバンニがやっとものを云いました。

「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいてあるねえ。」

「ああ。」

「橋を架けるとこじゃないんでしょうか。」女の子が云いました。

「あああれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ。」

その時向う岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がぎらっと光って柱のように高くはねあがりどおと烈しい音がしました。

「発破だよ、発破だよ。」カムパネルラはこおどりました。

その柱のようになった水は見えなくなり大きな鮭や鱒がきらつきらつと白く腹を光らせて空中

に抛り出されて円い輪を描いてまた水に落ちました。ジョバンニはもうはねあがりたくらい気持が軽くなって云いました。

「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒やなんかまるでこんなになってはねあげられたねえ。僕こんな愉快な旅はしたことない。いいねえ。」

「あの鱒なら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかな居るんだな、この水の中に。」

「小さなお魚もいるんでしょうか。」女の子が談につり込まれて云いました。

「居るんでしょう。大きなのが居るんだから小さいのもいるんでしょう。けれど遠くだから小さいの見えなかったねえ。」ジョバンニはもうすっかり機嫌が直って面白そうにわらって女の子に答えました。

「あれきつと双子のお星さまのお宮だよ。」男の子がいきなり窓の外をさして叫びました。

右手の低い丘の上に小さな水晶でもこさえたような2つのお宮がならんで立っていました。

「双子のお星さまのお宮って何だい。」

「あたし前になんべんもお母さんから聴いたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮で2つならんでいるからきつとそうだよ。」

「はなしてごらん。双子のお星さまが何したっての。」

「ぼくも知ってらい。双子のお星さまが野原へ遊びにでてからすと喧嘩したんだろう。」

「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸にね、おっかさんお話をすったわ、……」

「それから彗星がギーギーフィーフィーて云って来たねえ。」

「いやだわたあちゃんそうじゃないわよ。それはべつの方だわ。」

「するとあすこにいま笛を吹いて居るんだらうか。」

「いま海へ行つてらあ。」

「いけないわよ。もう海からあがつていらつしやったのよ。」

「そうそう。ぼく知つてらあ、ぼくおはなししよう。」

川の向う岸が俄かに赤くなりました。楊の木や何かもまつ黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のように赤く光りました。まったく向う岸の野原に大きなまつ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗いろのつめたそうな天をも焦がしそうでした。ルビーよりも赤くすきとおりリチウムよりもうつくしく酔ったようになってその火は燃えているのでした。

「あれは何の火だらう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだらう。」ジヨバンニが云いま

した。

「蝸の火だな。」カムパネルラが又地図と首つ引きして答えました。

「あら、蝸の火のことならあたし知ってるわ。」

「蝸の火ってなんだい。」ジョバンニがききました。

「蝸がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聞いたわ。」

「蝸って、虫だろう。」

「ええ、蝸は虫よ。だけどいい虫だわ。」

「蝸いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあつてそれで螫されると死ぬって先生が云つたよ。」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯う云つたのよ。むかしのバルドラの野原に1びきの蝸がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですって。するとある日いたちに見附かつて食べられそうになつたんですって。さそりは一生けん命遁げて逃げたけどとうとういたちを押えられそうになつたわ、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまつたわ、もうどう

してもあがられないでさそりは溺れはじめたのよ。そのときさそりは斯う云ってお祈りしたとい
うの、

ああ、わたしは最後までいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいた
ちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになってしま
った。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちに呉れ
てやらなかったろう。そしてたらいたちも1日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらん
下さい。こんなにむなく命をすてどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだ
をおつかい下さい。って云ったというの。そしてたらいつか蝸はじぶんのからだがまっ赤なうつく
しい火になって燃えてよるのやみを照らしているのを見たって。いまでも燃えてるってお父さん
仰ったわ。ほんとうにあの火それだわ。」

「そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちょうどさそりの形にならんでいるよ。」
ジョバンニはまったくその大きな火の向うに3つの三角標がちょうどさそりの腕のようにこっ
ちに5つの三角標がさそりの尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそ
のまっ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

その火がだんだんうしろの方になるにつれてみんなは何とも云えずにぎやかなさまざまの楽の音や草花の匂のようなもの口笛や人々のざわざわ云う声やらを聞きました。それはもうじきちかくに町か何かがあつてそこにお祭でもあるというような気がするのです。

「ケンタウル露をふらせ。」いきなりいままで睡っていたジョバンニのとなりの男の子が向うの窓を見ながら叫んでいました。

ああそこにはクリスマスストリイのようにまっ青な唐檜かみみの木がたつてその中にはたくさんのおたくさんの豆電燈がまるで千の蛍でも集つたようについていました。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ。」カムパネルラがすぐ云いました。「以下原稿1枚?なし」

「ボール投げなら僕決してはずさない。」

男の子が大威張りで云いました。

「もうじきサウザンクロスです。おりる支度をして下さい。」青年がみんなに云いました。

「僕も少し汽車へ乗つてゐるんだよ。」男の子が云いました。カムパネルラのとりの女の子はそわそわ立って支度をはじめましたけれどもやっぱりジョバンニたちとわかれたくないようなようす

でした。

「ここでおりなけあいけないのです。」青年はきちつと口を結んで男の子を見おろしながら云いました。

「厭だ。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。」

ジョバンニがこらえ兼ねて云いました。

「僕たちと一緒に乗って行こう。僕たちどこまでだつて行ける切符持つてるんだ。」

「だけどあたしたちもここで降りなけあいけないのよ。ここ天上へ行くとこなんだから。」女の子がさびしそうに云いました。

「天上へなんか行かなくなつていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりもっといいところをこさえなけあいけないって僕の先生が云つたよ。」

「だつておつ母さんも行つてらっしゃるしそれに神さまが仰っしゃるんだわ。」

「そんな神さまうその神さまだ。」

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「そうじゃないよ。」

「あなたの神さまってどんな神さまですか。」青年は笑いながら云いました。

「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもそんなでなしにほんとうのたった一人の神さまです。」

「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です。」

「ああ、そんなでなしにたったひとりほんとうのほんとうの神さまです。」

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。」青年はつましく両手を組みました。女の子もちょうどその通りにしました。みんなほんとうに別れが惜しそうでその顔いろも少し青ざめて見えませんでした。ジョバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

「さあもう支度はいいんですか。じきサウザンクロスですから。」

ああそのときでした。見えない天の川のずうつと川下に青や橙やもうあらゆる光でちりばめられた十字架がまるで一本の木という風に川の中から立ってかがやきその上には青じろい雲がまるい環になって後光のようにかかっているのです。汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのようにまっすぐに立ってお祈りをはじめました。あっちにもこっちにも子

供が瓜に飛びついたときのようなよろこびの声や何とも云いようない深いつつましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になりあの苹果の肉のような青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかに繞っているのが見えました。

「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひびきみんなはそのその遠くからつめたいその遠くからすきとおった何とも云えずさわやかなラッパの声をききました。そしてたくさんのシグナルや電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになりとうとう十字架のちょうどま向いに行つてすつかりとまりました。

「さあ、下りるんですよ。」青年は男の子の手をひきだんだん向うの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら。」女の子がふりかえつて2人に云いました。

「さよなら。」ジヨバンニはまるで泣き出したのをこらえて怒つたようにぶつきり棒に云いました。女の子はいかにもつらそうに眼を大きくしても1度こつちをふりかえつてそれからあとはもうだまって出て行つてしまいました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまい俄かにならんとしてさびしくなり風がいつぱいに吹き込みました。

そして見ているとみんなはつつましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひざまず

いていました。そしてその見えない天の川の水をわたってひとりの神々しい白いきもの人が手をのばしてこっちへ来るのを2人は見ました。けれどもそのときはもう硝子の呼子は鳴らされ汽車はうごき出しと思ううちに銀いろの霧が川下の方からすうっと流れて来てもうそっちは何も見えなくなりました。ただたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち黄金の円光をもった電気栗鼠が可愛い顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

そのときすうっと霧がはれかかりました。どこかへ行く街道らしく小さな電燈の1列についた通りがありました。それはしばらく線路に沿って進んでいました。そして2人がそのあかしの前を通って行くときはその小さな豆いろの火はちょうど挨拶でもするようにほかっと消え2人が過ぎて行くときまた点くのでした。

ふりかえって見るとさっきの十字架はすっかり小さくなってしまいほんとうにもうそのまま胸にも吊されそうになり、さっきの女の子や青年たちがその前の白い渚にまだひざまずいているのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行つたのかぼんやりして見分けられませんでした。

ジョバンニはああと深く息しました。

「カムパネルラ、また僕たち2人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんか百べん灼いてもかまわない。」

「うん。僕だつてそうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」ジヨバンニが云いました。

「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云いました。

「僕たちすっかりやろうねえ。」ジヨバンニが胸いっぱい新しい力が湧くようにふうと息をしながら云いました。

「あ、あそこ石炭袋だよ。そのの孔だよ。」カムパネルラが少しそつちを避けるようにしながら天の川のひととを指さしました。ジヨバンニはそつちを見てまるでぎくつとしてしまいました。天の川のひととに大きなまっくらな孔がどほんととあいているのです。その底がどれほど深いかその奥に何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えずただ眼がしんしんと痛むのでした。ジヨバンニが云いました。

「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに

行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集つてゐるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつあすこにいるのぼくのお母さんだよ。」カムパネルラは俄かに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

ジョバンニもそつちを見ましたけれどもそこはぼんやり白くけむっているばかりどうしてもカムパネルラが云つたように思われませんでした。何とも云えずさびしい気がしてぼんやりそつちを見ていましたら向うの河岸に2本の電信ばしらが丁度両方から腕を組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ。」ジョバンニが斯う云いながらふりかえつて見ましたらそのいままでカムパネルラの座っていた席にもうカムパネルラの形は見えずただ黒いびろうどばかりひかっています。ジョバンニはまるで鉄砲丸のように立ちあがりました。そして誰にも聞えないように窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって叫びそれからもう咽喉いっぱい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにまっくらになったように思いました。

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたのでした。胸は何

だかおかしく熱り頬にはつめたい涙がながれていました。

ジョバンニはばねのようにはね起きました。町はすつかりさっきの通りに下でたくさん灯を綴つてはいましたがその光はなんだかさつきよりは熱したという風でした。そしてたつたいま夢であるいた天の川もやっぱりさっきの通りに白くぼんやりかかりまっ黒な南の地平線の上では殊にけむつたようになってその右には蠟座の赤い星がうつくしくきらめき、それぞんたいの位置はそんなに変つてもいないようでした。

ジョバンニは一さんに丘を走つて下りました。まだ夕ごはんをたべないで待つているお母さんのことが胸いっばいに思いだされたのです。どんどん黒い松の林の中を通つてそれからほの白い牧場の柵をまわつてさっきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。そこには誰かがいま帰つたらしくさつきなかつた1つの車が何かの樽を2つ乗つけて置いてありました。

「今晚は、」ジョバンニは叫びました。

「はい。」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「何のご用ですか。」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかつたのですが」

「あ済みませんでした。」その人はすぐ奥へ行つて1本の牛乳瓶をもつて来てジョバンニに渡しながらまた云いました。

「ほんとうに、済みませんでした。今日はひるすぎうっかりしてこうしの棚をあけて置いたものですから大将早速親牛のところへ行つて半分ばかり吞んでしまひましてね……」その人はわらいました。

「そうですか。ではいただいて行きます。」

「ええ、どうも済みませんでした。」

「いいえ。」

ジョバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもつて牧場の柵を出ました。

そしてしばらく木のある町を通つて大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になつてその右手の方、通りのはずれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行った川へかかった大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立っていました。

ところがその十字になった町かどや店の前に女たちが78人ぐらいつ集つて橋の方を見ながら何かひそひそ談しているのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいつぱいなのでし

た。

「ジョバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなつたように思いました。そしていきなり近くの人たちへ
ちへ

「何かあつたんですか。」と叫ぶようにききました。

「こどもが水へ落ちたんですよ。」一人が云いますとその人たちは一斉にジョバンニの方を見ました。ジョバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱい、河が見えませんでした。白い服を着た巡査も出ていました。

ジョバンニは橋の袂から飛ぶように下の広い河原へおりました。

その河原の水際に沿つてたくさんのあかりがせわしくのぼつたり下つたりしていました。向う岸の暗いどてにも火が7つ8つうごいていました。そのまん中をもう烏瓜のあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろにしずかに流れていたのでした。

河原のいちばん下流の方へ州のようになって出たところに人の集りがくつきりまっ黒に立っていました。ジョバンニはどンドンそっちへ走りました。するとジョバンニはいきなりさつきカムパネルラといっしょだったマルソに会いました。マルソがジョバンニに走り寄つてきました。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ。」

「どうして、いつ。」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこったろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだろう。」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附からないんだ。ザネリはうちへ連れられてった。」

ジョバンニはみんなの居るそっちの方へ行きました。そこに学生たち町の人たちに囲まれて青じろい尖ったあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着てまっすぐに立って右手に持った時計をじっと見つめていたのです。

みんなもじっと河を見ていました。誰も一言も物を云う人もありませんでした。ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行っ

たり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れているのが見えるのでした。

下流の方は川はば一ぱい銀河が巨しく写ってまるで水のないそのままのそらのように見えませんでした。

ジヨバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかないというような気がしてしかたなかったのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ。」と云いながらカムパネルラが出て来るか或いはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて誰かの来るのを待っているかというような気がして仕方ないらしいのでした。けれども俄かにカムパネルラのお父さんがきっぱり云いました。

「もう駄目です。落ちてから45分たちましたから。」

ジヨバンニは思わずかけよって博士の前に立って、ぼくはカムパネルラの行った方を知っています。ぼくはカムパネルラといっしょに歩いていたのですと云おうとしましたがもうのどがつまって何とも云えません。すると博士はジヨバンニが挨拶に来たとでも思ったものですか、しばらくしげしげジヨバンニを見ていました。

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚はありがとう。」と町ねいに云いました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅く時計を握ったまままたさきました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。ぼくには一昨日大へん元気な便りがあつたんだが。今日あたりもう着くろなんだが。船が遅れたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっばいにうつつた方へじつと眼を送りました。

ジョバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方へ走りました。

新書_縦組_文字：小